# 「みんなの中の私」が表出されるまで

## ― 自閉症のある子どもの思春期 ―

山崎徳子

### はじめに

障害児学童保育Pは、子どもたちに安全で楽しい余暇の場をと願う保護者の皆さんが、設立し、運営しているもので、学校が長期休みの間だけ開かれます。ここで私は指導員として、就学前から支援学校高等部までのさまざまな年齢の自閉症のある子どもと過ごしています。

従来、家族などとの愛着形成後、学童期以降の自閉症のある子どもの、人とかかわろうとしない姿は、子どもの特性と、人をも含んだ環境との相互作用による集団不適応の行動問題であるとされてきました。私は、障害児のサークルなどで自閉症のある子どもの保護者たちと、共にわが子を育ててきた体験から、自閉症のある子どもを療育対象と見る前に「育てる―育てられる」関係性を素朴に生きようとする「育てる」という枠組みの下、他者との関係性を出発点にその育ちを考えています。

育てる者は、子どもが自己を主張して生き生きと振る舞うことと、周りに目を向けて友達と一緒がいいと仲よくすることの、一見、矛盾する二つのあり方の両立を願っているのではないでしょうか。このような視点に立てば、行動問題とされている、人とかかわろうとしない子どもの姿は、周囲他者との関係性における「私は私」と「みんなの中の私」という主体における自己意識の両面の育ちの課題としてとらえることができます。

二〇〇X年の夏休み、それまで他者に対する一方的な働きかけや拒否的な言動がみられていたまさき（仮名　特別支援学校中等部二年生　男児）が、終盤になって周囲の子どもたちを「友達」と呼んでかかわりを求めた姿を、私は目の当たりにしました。自己意識がどのように形成されるのかは大変難しい問題ですが、この夏のまさきには、他者との対話的な関係が自己内の対話的関係――「内的な他者」を生み出し、さらに現実の他者との関係形成の広がりにつながっていくことで、自己意識の変容があったのではないかと考えました。

そこで本稿では、まさきの変容を、「私は私」と「みんなの中の私」という自己意識の観点から考察し、周囲の人々のかかわりの意味を問うことを試みました。

本稿の方法論は『関与・観察とエピソード記述[注]』（鯨岡、2005）によりました。人々の体験を気持ちのつながりの次元でとらえるためには、自らが身体を携えてその場に臨み、固有のその人に即して行われなければなりません。この方法とその人を大切にすることは方法的態度としてつながっています。

まさきの成育歴は母親からの聞き取り、事例中の「棒人間」の描画は活動中に私が携帯電話の撮影機能で撮ったものです。

## 事例

乳幼児期のまさきは、抱いてもぴたっと身体に添ってこないような子どもで、何を志向しているのかわからないような多動もありました。就学前二年間療育事業所に通所。母親は「寄り添って」遊ぶことを試みますが、まさきからの映し返しがないことから、ひどく苦痛だったと言います。四歳で中度の自閉症との診断を受けました。四、五歳ごろ多動はなくなり、就学前までに家族など親しい人との間には一定のコミュニケーションが成立しました。三年生まで地域の小学校の情緒障害学級に在籍した後、養護学校小学部に編入。

中学一年生まで、障害児学童保育Pでのまさきは担当のボランティアとはすぐよい関係をつくり、活動の流れにスムーズにのっていく子どもでした。

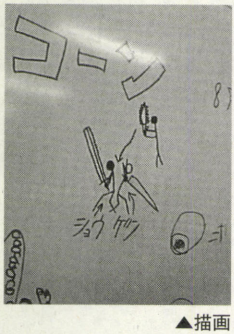
二〇〇X年の夏前には、自己主張をはっきりするようになっていましたが、

①ボランティアを寄せ付けない

②武器を持つ「棒人間」を描く（描画参照）

③上半身を脱力し、ひざから崩れ落ちるような動作をする

などの気になる行動も出てきていました。



▲描画

紙幅の都合で、詳細を記すことができませんが、八月中に次のようなエピソードがありました。

**①必要だった映し返す他者の存在**

この年の保育初日、市民プールの活動の日、ボランティアの数が足りていなかったこともあり、まさきには、担当ボランティアをつけず、小学生の所在確認など指導員の補助的な役割を担ってもらおうと

したところ、「僕のボランティアさん誰?」と尋ねられました。私はボランティアへの拒否的な態度がそのままの意味ではないこと、また、楽しさを共有してくれる大人がいなければ自然に気持ちがほかの子どもに向かうという単純なものではないことに気づき、同世代の子どもと関係を結ぶには、彼の自己意識に何らかの質的な飛躍が必要ではないのかという、一つの問いをもちました。

**②「棒人間」によるやりとり**

ボーリング遊びの時の得点表の横に「棒人間」を描き、吹き出しにその回最高得点だった私に「のりちゃん一番ですね　おめでとう」と書いてくれました。「棒人間」が人との関係性を肯定的に動かすために使われた、初めての出来事でした。

**③自己に向かうやり場のない衝動**

いつもふざけて、まさきにつきまとうメンバーに対して、いやだと言うことができずに、まるでその怒りを自分に向けるかのように脱力を繰り返しました。他者との相互性の経験の乏しさには受け止めることの弱さが含まれており、関係形成に難しさを生むと感じられました。

**④意味の共有を含む能動—受動**

和田君（福祉系の大学生）は何年もまさきと付き合いがあり、好かれているボランティアです。この日久しぶりに担当になりました。

**「道を作ってくれてどうもありがとう」**（8.29）

活動内容：料理、散策

場所：A公民館

調理はスムーズに進み、まさきはフライパンに二つのハンバーグを入れ、焼き始めると、すぐ隣にあった白板に何人かの「棒人間」を描きました。そして、少し離れた所に一軒の家を描き、「この人は家を建てました」と何回か繰り

返し言います。まさきのすぐ脇にいた私は、「ふーん、この人は家を建てたの」と相づちは打ちましたが、この行為を好ましく思えなかったので、その「棒人間」とまさきの発した言葉への関心を示すことに二の足を踏んでいました。次にまさきは「突然、道がなくなってしまいました」と何度か繰り返して言いましたが、私は何の返答もせずそこを離れました。まさきは和田君に、ていねいな言葉使いで「道を描いてくれますか」と依頼しました。和田君は、「えっ」と意味をつかみかねている様子でしたが、「棒人間」と家の間を曲線で結びました。まさきは、また白板に戻り、その道を進む「棒人間」を何人か描きました。

ハンバーガー二皿がおいしそうにできあがりました。すると、まさきは白板の家の横にもう一人大きな「棒人間」を描き、吹き出しに「道を作ってくれてどうもありがとう」と書き加えました。その「棒人間」は湯気のあがるできたてのハンバーガーがのったお皿を持っていたのでした。そして、まさきは実際のハンバーガーの皿の一つを「ふん」と和田君に差し出しました。

**[考察]**

このやりとりは、数年まさきと共に過ごしてきた和田君にとって、特別な意味をもつものでした。できあがったハンバーガーを差し出された時、和田君は自分がまさきと過ごしたこれまでの日々を思ったと言います。「道を作ってくれてありがとう」の中に、道を描いたことへの感謝を超え、ありがとうと言ってくれるまさきに、よくぞここまで育ってくれたという、彼の成長への喜びとうれしさがありました。

まさきは私と和田君のうれしい気持ちを受け止めることを繰り返し、人に喜ばれ、自分もうれしいという心の動きが蓄積していきました。その全体を通して、まさきの自己意識に他者との関係における自分が誇らしいものとして映ります。学童期以降の子どもの「共にあろう」とする志向性には、こういう自己肯定感の高まりが不可分にあると考えられます。

**⑤表出された「みんなの中の私」**

最終日のプールで、まさきは私と、指を「棒人間」に見立てて助け合う遊びをしました。その後、フロートに乗ってプールの真ん中に向かってこぎ出し、子どもたち一人ひとりに呼びかけ、「友達を発見しました」と報告したのです。

## おわりに

障害児学童保育Pで包まれるような状態であったまさきの自己性は早期に発揮され、「私は私」という自己意識は充実しましたが、他者を受け止めることはできず、自己防衛的になっていました。「棒人間」を使っての人とのやりとりは、自己内の対話的関係を生み出し、さらに豊かになった他者との対話的関係の中で、相互に主体として受け止めることの繰り返しがなされました。まさきは自分がなりたい「良き自己」を感じ、人格を形成することの喜びや誇りを得、人にかかわろうとする志向性が生まれたのです。「みんなの中の私」という自己意識の元になったまさきの「内的な他者」に生命を吹き込んだのは、「障害への対応」ではなく、子どもの育ちに寄り添い、成長を喜びあう周囲の人々の心情だったのではないでしょうか。

（常磐会学園大学講師）

**注（参考文献）**

鯨岡　峻『エピソード記述入門　実践と質的研究のために』東京大学出版会　二〇〇五年